北総里山タウンミーティング

――生物多様性ちば県戦略にむけて――

『里山に囲まれたまちづくりをめざして、いま　私たちにできること』

2006.12.10.　13:30～16:00　　於:東京電機大学

■開催あいさつ：ケビン・ショート氏

僕は印西に 20 年間住んでいます。はじめは 1,2 年したらすぐに引っ越すつもりだったけれど、この北総地域がとても気に入り　2 年前、残りの人生を此処で暮らそうと 15 年ローンを組んで 3,500 万のマンションを買いました。

僕はニューヨークで育ったので、里山が好きと同時に、文化的刺激、多様な人の集まる大都会も好きです。日本の不動産は高いけれど、家から北に向かうと 5 分で千葉ニュータウン中央駅、3 分でイオン、映画館、50 分で東京にでられます。

反対にマンションから出て南に曲がると 5 分で里山に行ける……林があり、谷間には田んぼがあり、田んぼの脇にはきれいな水が流れている。こういうところは、日本にはなかなかない、すばらしい生活環境です。便利さと豊かな自然の名コンビがここの何よりの魅力となっている。そう考えると 3500 万円は決して高くない、いい買い物をしたなぁ、といつもそう思っています。

この北総台地の里山は今はまだよい状態で残っているけれど、それは今までの開発が千葉ニュータウンの中に限られてきたから。でもここ 5～6 年で里山自然がどんどん失われてきました。今日のタウンミーティングの 1 つの目的は、このすばらしい北総地域の里山自然をこれからどういう形で、どういうシステムで、どういう叡智で守っていくか、ということになると思います。

■千葉県によるタウンミーティングの趣旨説明

千葉県環境生活部環境政策課　　斉藤　博室長

・千葉県環境基本計画の 10 年ぶりの見直し
・「生物多様性ちば県戦略づくり」は新規事業

これら 2 つのことについて、県内 20 ヶ所でタウンミーティングが開かれている。

環境基本計画は、１、循環型社会を作る、２、自然との共生、３、地球環境保全、４、みんなが参加する　の 4 本柱になっている。今回のタウンミーティングは、生きものがどのように生きていくか、自然との共生をどうするかといった、生物多様性の目的となるところである。タウンミーティングの意見として取り入れていきたい。

千葉県環境生活部自然保護課　　大木　実主幹

1992 年リオデジャネイロの生物多様性条約の時、堂本暁子が熱心に取り組んできた。今までは、国レベルでの取り組みであった。地域レベルでの取り組みが必要になってきた。生物多様性ちば戦略は、地域の特徴を出すために、学識経験者と市民の意見を集めるタウンミーティングの２本柱になっており、来年６月にむけて戦略を策定していく。12 月 23 日には、千葉県中央博物館でタウンミーティングの総括大会が行われる。ぜひ、お越しください。今日は、地域の意見をお聞かせください。

■スライドショー：長谷川雅美　――北総の里山物語――

自然の豊かさに惹かれて、
　千葉ニュータウンに暮らし始めました
　　しかし　自宅と会社を往復する日々……

―――そこでうららかな春の日曜日
　　里山歩きを始めてみました―――

千葉ニュータウンの風景

千葉ニュータウンの歴史は
　実は 1000 年の歴史があった

でも、いいところばかりじゃない

みんなの活動や
勉強会の紹介

――― 里山自然にふれた子どもたちが、
大きくなってもどってきて欲しい ―――

つづく

■講演:池田志朗氏　――イギリスのニュータウン開発の顛末に学ぶ――

イギリスはニュータウンの生まれ故郷といえる。第二次大戦後、ロンドン復興のため『大ロンドン計画』が作られた。ロンドンの周辺に 16km 程のグリーンベルトを造り、その周りに衛星状に独立型の都市を並べる計画で、それが NEW TOWN ACT＝ニュータウン法として定められ、文字通りニュータウンとして開発された。(その原型は 20 世紀初頭に生まれた田園都市)

日本でも全国でニュータウンと呼ばれる街は数多くあるが、法律で定められた用語ではない。しかし、千葉、多摩、港北等のニュータウンは、計画人口が 20 万人級と大型で日本型ニュータウンの代表例と位置づけることが可能だろう。

イギリスの特徴的ニュータウン開発の紹介

① **レッチワース：最古の NT**（1903 年開発開始の NT の原型）　計画人口 3.2 万人
1,800ha ロンドンから約 55km　**（田園調布はこれをなぞって作られた）**

コンセプト　周辺農地、工場地区、商業地区、住宅地区を 1 セットとし、田園と都市の魅力を兼ね備えた自立的で継続可能な地域運営。

特徴　当初からの人口規模を守る小規模な「田園都市」。コンセプト通りに造られた街は、全体が庭園（garden）の様相。住宅は一定のデザインコードに

従って改修されている為、百年経っても今も、街の景観は変わらない。当初から積極的に何も作り込まないオープンスペースが位置付けられている。

発想の紹介　“田園都市論”:エベネザー・ハワード(1850～1928):〝3つの磁石〟TOWN(町)、COUNTRY(田園)より、TOWN　COUNTRY(田園都市)の“磁力”こそが人々を惹き付ける。

背景　イギリスでは18世紀からの産業革命による大都市への人口集中と農村の荒廃により、大都市の劣悪な居住環境が限界に達していた。

② **ミルトンキーンズ:最大の NT**(1967 年開発開始)　計画人口約 25 万人　6,800ha

日米等外国企業とその家族などが多く居住し、国際都市として発展した。日本のつくば学園都市のイメージに近い。

コンセプト　高速道路、鉄道と運河によりロンドンとバーミンガムを結ぶ中間に新都市を造り、既存大都市への集中を緩和する。

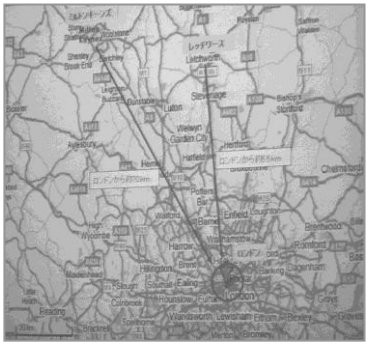
特徴　自動車が前提の大規模開発でアメリカ的都市景観に近いが、既存の農村集落をそのまま取り込んでいること、運河が住宅地まで入り込む街区、多数の里山的公園等で伝統的地域環境を保全している。

発想の紹介　パブリックフットパス**”Public footpath”**＝公共の散歩道の発達。土地所有に優先する通行権を設定した遊歩道。他人の家先であろうと公徳心を持って通らしてもらおうとのイギリスの伝統的制度

③ **カンバノールド：比較対象として紹介**　都市機能高度集積型。

計画人口 72,000 人　　744ha

母都市グラスゴーとの競合で苦戦。



コンセプト　タウンセンターは公共交通、自家用車、歩行者動線を立体的にし高度集積化を図る。

特徴　センター施設も閑散としており、都市的魅力形成に成功したとは見えない。グラスゴーの再開発が誤算？

④ **アーヴィン：最後の NT**　計画人口 84,000 人　4,960ha

コンセプト　新経済性頂点の建設とスラムの解消が課題の開発。既存市街地の商業・行政機能を補完し、環境保全型に転換したニュータウン。

特徴　当初、旧市街とは別に、新タウンセンターの整備を計画するが、時代の変化から戦略転換し、旧市街地と新市街地の一体化を図る。**イギリスの NT 開発の顛末を体現して 1998 年事業終了。**

“エリントン・カントリーパーク”の整備：炭鉱跡地を利用し小川、森、牧場、農場等に城跡を取り込み、乗馬、球技場などを加えた里山体験型公園整備を開発益により実現したことが示唆に富んでいる。

発想の紹介　地域の自然・文化環境の保全を根底に、旧市街地を活性化させながら、新旧市街地の一体化を図る。自然･文化資源を発掘し、子どもたちをその中で遊ばせることを通して、生活の伝統（way of life）を伝える。

ニュータウン開発の着地点

ニュータウンの原型“Garden City”（田園都市）は**英国人が古来受け継いできた自然への畏敬の念、美的秩序への感性**を呼び覚ますことに成功した。

イギリスのニュータウン開発の顛末を見れば、着地点もまた“Garden City”の文脈上にあることが分かる。

同様の発想が千葉ニュータウンの計画にも見ることが出来る。千葉ニュータウンは北総線を分水嶺として、北は手賀沼水系、南が印旛沼水系になる北総台地上に広がっており、この両水系を巡っての様々な歴史が積層して来た。

印西牧の原地区は南北の谷津部分から駅前近くまで緑の軸が貫入しており、駅を降りると大規模な商業施設群を脇に見て、すぐ前の牧の原公園から緑の軸が谷津につながっている。これは今後の千葉ニュータウンの方向を示唆するものではないだろうか。

日本とイギリスの自然観の根底には、ストーンヘンジと三内丸山遺跡が太陽を意識していることに象徴される共通点が見られる。

“集落”が自然との間で生活の糧を生み出すことができる一方で、“都市”はお金や暴力で他所から糧を取り込む性格を持つ。地球環境が課題の今後の都市モデルは、“集落”的に周囲の自然を活かすものとならざるを得ないだろう。

■スライドショー：長谷川雅美　　——生きものの声を聴こう——

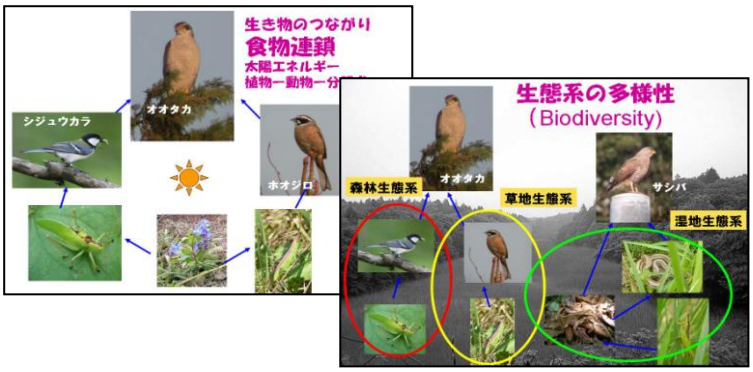
目を凝らして、耳を澄ましてみると私たちの周りには色々な生きものが住んでいることに気付きます。

そんな生きものたちと共に暮らすには、どういったことに気をつけていけばいいのでしょうか・・・

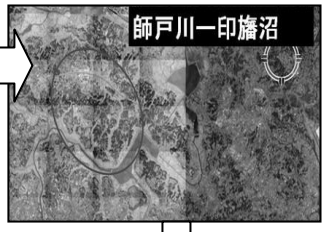
生物多様性を守ることは
いきものの声に耳を傾けること

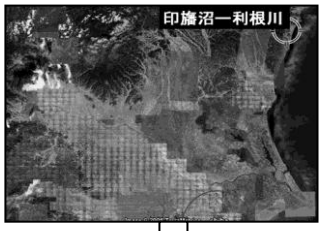
自然を深く関心を持って接すること、それは私たち自身の生活に潤いを与えることにつながります。
生きものの名前を知り、どこに住んでいるかを捉え、
その生きものがどういうつながりを持って暮らしているのか……。

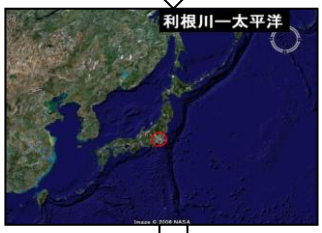
森と草地と湿地、**それぞれに食物連鎖**があって、それを束ねた形でサシバやオオタカなどの猛禽類がいます。オオタカがいる里山は、生態系が多様であることの象徴ということになります。

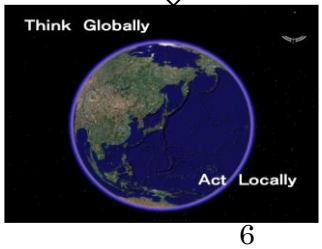


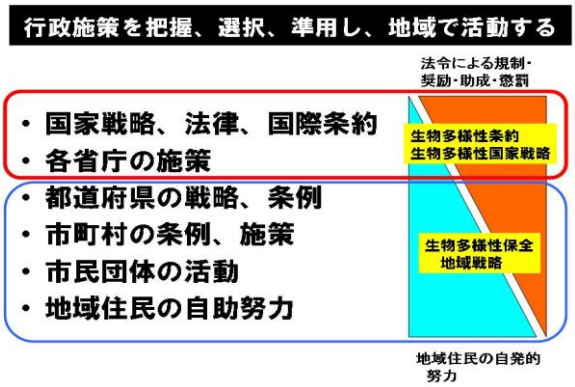
生物の多様性を保全する時に心がけておきたいこと、それは、『**お気に入りの場所を1つ持ちましょう**』ということです。足元の身近な自然が地球につながっているのです。



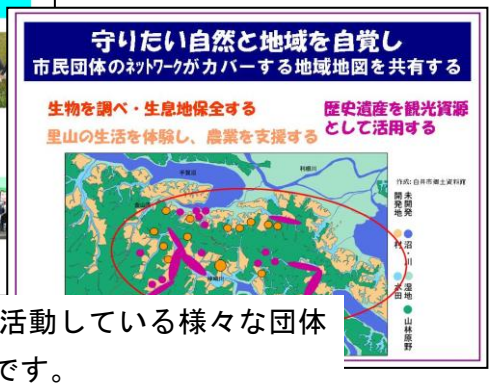








国は法で生物多様性を進めています。
県は、現場の地域住民からの自発的努力の積みあがりによる戦略を進めようとしています。



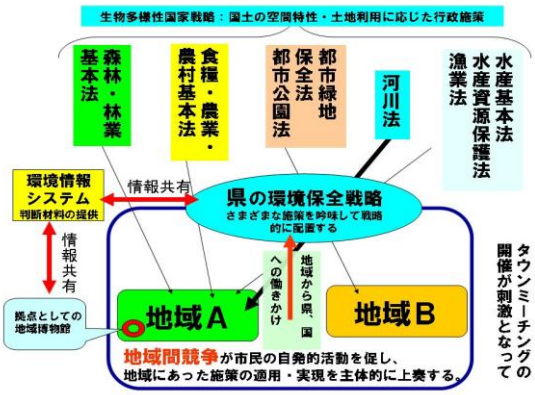
生物多様性の保全には、今活動している様々な団体が連携していくことが大切です。

ここ北総地域（印旛沼、手賀沼集水域）は、40 年前から現在まであまり市街地化が進んでいない場所です。印旛沼、手賀沼を汚さない地域と考えるならば、無秩序な開発は非常にまずいということになります。

今までのまちづくりは、都市の生態系のみを追求してきました。これからまちが生き延びていくためには、まわりの生態系と調和させた地元の環境保全政策が必要になってきます。

でも、都市計画法に基づいて都市計画を千葉ニュータウンでやり、河川法に基づいて印旛沼をやり、林業は房総半島で・・・というように、国単位のやり方は地元にとってみるとどれもちぐはぐで中途半端になってしまいます。

ですから、地元の環境保全政策は、国からのやり方をそのまま受けていくのではなく、地元の方から施策をもってくるなり、どんな施策が必要なのかをきちんと学んで活用していくことが必要なのだと思います。
私は生きものを大事にすると同時に、人間が作った



■意見交換　――＜司会　丹澤正直＞――

丹澤　里山に囲まれた町に住んでいる私達が、里山保全について考えていることや気付いていることを出してほしい。

参加者　里山は産廃物が多く埋められている。赤土を掘り出して、産廃を埋めているのは 30 年位前からだ。そこは畑になっている。里山は見た目にはきれいだが、中からは汚染物質が浸出している。どうしたらよいか。

丹澤　これから皆さんと解決の方法を意見交換していきたい。

参加者　川べりを散歩していたら、銃を持ち犬を連れた人が現れた。民家から 800m離れていれば良いというが、この時代に狩猟は禁止すべきではないか。バードウォッチングするにも怖くて歩けない。市はどういう対応をしているのか。

丹澤　確かに怖いですね。ところで、タウンミーティグは、県や市に要望をするという場ではなく、私達自身で問題をどう解決したらよいのかを話し合う場です。いまの問題も一緒に考えていきましょう。

参加者　この地に 23 年住んで、地域の変遷を見てきた。新住民と在来住民との断絶がある。臭い（養鶏とか養豚とか）、廃材処理等の燃焼行為、埋め立て等が問題になってきた。所有者

がいる中で他人の土地への要求は難しく、うまく在来の方たちと融合していかないと私達が目指しているものをどう実行するか、なかなか見えてこないと思う。

長谷川　里山保全のまちづくりをしたいがそこに横たわる障害を具体的にどうして行くか、今日の話ではなかなか見えてこないということですね。

参加者　白井に住んで有機農法をしている。3 つ提案したい。

① 団地の中に里山を作ろう。樹木には農薬を使用せず、落ち葉を土に返そう。

② 森に囲まれた土地で農業をしている。しかし、印西の森は（雑木林でないので）落ち葉が少ない。農家も土地をもてあましている。新住民と在来住民のコンタクトの場、接点がないから土地を有効に使うことも出来ない。だが、もし家庭菜園、森などに興味をおもちならとにかく、在来地区へ入ってみて欲しい。キーパーソンはきっと、いるから。

③ 企業庁や県が保有している土地がある。塩漬けになっている土地を年 2 回も税金を投じて草刈している。企業庁等に交渉して、有効利用すべきだ。

参加者　谷津田は生き物の宝庫。その中を流れる水路のコンクリート護岸はやめてほしい。農家は（崩れやすい）多自然型護岸を敬遠すると聞いた。コンクリート三面張りがよいか、多自然型護岸がよいか。水路工事を企画する県には、生きものにとって良好な水路、千葉県モデルを考えて欲しい。

参加者　大森に住んで、飲料水にもなる利根川の水質調査をしている。利根川の水道取水口の直ぐ上流に、手賀沼流域下水道の排水口がある。友人に、農薬の有機リンが原因でハウスシックの人もいる。生き物が豊かな里山は大切だが、里山を考えるなら、農薬の問題を考えないといけない。

丹澤　里山保全に関連している 15 団体が実行委員会になって、今日の会を企画した。今抱えている問題に日ごろ活動している人が、自分達はこんなことをしているという体験を語って欲しい。

参加者　白井に来て 20 年。PTAを通して新住民と在来住民との交流をしてきた。里山づくりという格式ばった話しではなく、互いに親しくなることが大切。地域で取れる梨や米を、顔見知りの新住民が積極的に購入すれば、自然に農薬使用も減っていく。荒廃する畑も新住民が耕せばよい。いい悪いは別問題として、新住民と在来住民と、消費者と生産者と接点を持ち、つながりを実践していくことが自然を守る原点であると思う。（拍手）

参加者　5 ヘクタールの森を保全しようと運動している。他人の持ち物である土地をあれこれいうから、在来地区の反感を買う。他人の土地には最大限の尊重をすべき。

新住民、在来住民という区別もいやだ。イギリスのハブリック　フットパスという考えがナショナル　トラストにも繋がったとの話だが、新住民の身勝手な里山保全説は修正されるべき。

追記：（私には白井や印西に昔から住む親戚が多くいます。先だって母親と同い年のいとこが近所の森が伐採されて住宅地になったことを大変嘆いていました。そのうち、ナシ栽培もやれなくなってしまうのではないか、というのです。しかし、その土地を売った地主さんの事情も耳に入っており、やはり面と向かっては何も言えないそうです。新住民であろうと、旧住民であろうと、緑の森が少なくなり、コンクリートに変わることに異を唱えたい人はいるはずです。新しく住み着いた人々だからこそ気付くこと、言える事があると信じます。農業を続ける

ために、ニュータウン建設に対峙した方々がこの地域に健在なことも確かです。狭くなってしまった農地では、生計がなりたたず、やむを得ず土地を手放なすしかない方々もいます。そういう方々との対話がこれからもっと大切になっていくと思います。長谷川)。

池田講師　ハブリック　フットパス　とは、イギリス文化の特徴を表現している。以前、イギリスの大学の敷地内に日系の大学を建造しようとして、公聴会を開いたら、犬の散歩道だから困るという住民意見が出た。それで半年も話し合ったということだ。これは、所有権とは、別な問題です。

参加者　　木下在住。森を整備している。ハブリックフットパスのようなものを作りたいと思う。整備作業のため、竹や枝を燃したところ、野焼き禁止だと過剰な反応があり、警察沙汰にもなった。竹を燃焼すれば竹酢液が取れ、森に竹炭効果も期待できると聞く。ごみの燃焼とは区別して欲しい。

また、草刈をしないでおくとすぐゴミを捨てられる。

丹澤　どういうまちにしていきたいのかをご意見を。

参加者　　白井在住。先ほどのスライドはきれいだが、あれを撮影するのに車で排気ガスを撒き散らして里山に行くのは、いかがなものか。白井、印西、印旛は広大な地域だが、自転車専用道路はほんの少し。作らない行政側も怠慢だ。自然を残そうという人が自転車専用道路を求めないとはおかしい。自然保護団体はエコロジーを考えて、里山へは自転車で行こう。篠竹から、ケーナという笛を作っている。県産の篠竹はケーナに最適。

追記：（写真撮影は、実行委員会のメンバーが日ごろ撮りためた写真を編集しました。今回の集会にあわせて無理やり写真を撮ってきたという印象を与えてしまったのかもしれませんが、ご指摘の点はまったく誤解です。生物の写真は、里山を静かに歩いていかないと撮れません。どうかご理解を。車が入れず、歩行者や自転車が安心して通れる道が必要なことは同感です。長谷川）

丹沢　　こういう貴重な意見が私たち自身が行動するきっかけになると思う。

ショート　この地域には、たとえば農道のように歩ける道は沢山ある。イギリスには、カントリーウォークという文化があるので、ハブリック　フットパスも生まれたが、千葉ニュータウンにはパブリックフットパスを作らなくても多くの道がある。ここには20分歩けば、素晴らしい里山がある。自分の足で歩き、里山の素晴らしさを知り、友人にも働きかけてほしい。そこから、どうやって保全したらいいか。方法は、他人の言葉でなく、自分で歩き、見つけて欲しい。

＊終わりの言葉　長谷川先生

12月23日には、県内タウンミーティングの総括があり、各地からの報告がある。

タウンミーティングの目的は付き合いの幅を広げることにあると考えていたが、意見交換にもあったように、ここで終わらず、付き合いを広げていきたい。実行委員会の中のグループで関心のあるものには、声をかけてください。

今日の機会を与えてくれた、知事、県、実行委員会、参加者の皆さんに感謝する。

■交流会

・小林住みよいまちづくりの会　高橋さん

自分たちの住んでいる場所を歩くことをしている。
横の連携がとれるミーティングが必要である。

・サシバグループ
印西の川にいる魚は日本中から集まっているのではないかと思われる。釣りをする人が川へはなすのではないか。魚はほかからもってきて放さないでほしい。そのためには、どうしたらよいか。

・長谷川雅美先生
もとからこの地域に生息している魚を知ること、調べることが大切です。

・東邦大　中條さん
批判する人と建設的な意見をいう人とに分かれている。建設的な意見だと参加しやすい

・東邦大　学生
大学近くのホタルの観察地が　地元の人の話の中で、高速道路の県・市の開発予定地となっているのを知る。次の代に受け継いでいける人がいない。もし、受け継いでいけるのなら、その土地を有効利用していきたい。

・牧の原の人
自治会が機能していない。隣同士が手をつながないといけない。自治会の活性化が必要である。

追記：（長谷川の感想：新しく住み着いた人は、隣に住む人よりも遠くても趣味や関心が同じ人々と関係を結び始めると思います。まず、自治会からと考えるよりも、ともかく地域の中で何らかの関係を結びことから始めた方が気が楽です。近所付き合いをしっかりと築くのはかなり高度な目標だと考えてはどうでしょうか？）

・ＲＣＮ三井さん　松戸市在住
地域の住民が声をあげなければ、政治も金も動かない。まずは、簡単なことを１つプロジェクトチームを組んで実現していく。小さな成功経験の積み重ねが必要である。

・60 才からでも農業に親しんでほしい。

・印旛村　高野さん
まず、現状の把握が大切。科学的調査をして
そこにお金を出してもらうようにして欲しい。

・地域の建設的な利害を盛り上げ、その点と点の地益を線に伸ばしていく。

記録：相馬なおみ

タウンミーティングの名称	参加人数
北総里山タウンミーティング –生物多様性ちば戦略づくりにむけてー	210～220
主催グループ名 北総里山タウンミーティング実行委員会	代表者名 長谷川雅美

実行委員名

NPO 法人ラーバン千葉ネットワーク・印西サシバ調査グループ・NPO せっけんの街印西・NPO 法人せっけんの街白井・印西ゴミと暮らしを考える会・小林すみよいまちづくりの会・NPO 法人いんざいこども劇場・白井環境ネットワークの会・白井の自然を考える会・NPO 法人しろい環境塾・北総生きもの研究会・白井社会ボランティアの会・NPO 法人環境カウンセラー千葉県協議会・エルコープ・東邦大学理学部地理生態学研究室

開催日時

2006 年　12 月 10　日　13　時　30　分　～　16　時　15　分

開催場所

東京電機大学福田ホール

プログラムの概要

① あいさつ（里山に囲まれたまちづくりをめざして、いま、私たちにできること）
② 趣旨説明　（県職員）
③ ――北総の里山物語――（スライドショー）
④ イギリスのニュータウン開発の顛末に学ぶ（講演：池田志朗氏　文化ｱｲﾃﾞﾝﾃｨﾃｨ研究所）
⑤ ――生きものの声を聴こう――（スライドショー）
⑥意見交換会

論点整理

1.解決が必要な問題

・里山自然が開発によってなくなってきている。どういうシステムで里山自然を守っていくかが課題

・森や農地の荒廃

・数十年前から穴を掘り産廃を埋めている場所が至る所にあり、そこが畑になっていたりする。畑の産物はもとより、浸み出し水（地下水）の弊害を考える対策が必要。

・民家から近い所が狩猟区になっていて、散歩するにも怖い。

・排水溝を通して汚れたものが、飲み水に直接結びつく川に流されている。家庭排水と共に、農薬の流入についても対策が欲しい。

・団地内街路樹の農薬散布

・所有権が強い日本では、他人の土地への要求は難しく、もともと住んでいる在来農家の方と　後から住んだニュータウン住民との断絶があり、接点がなさすぎる。

・新住民がもともと住んでいる人様の土地をきれいごとを言って残せと言っている。

・自然保護といいながら排気ガスを出す車での里山探索を考え直して欲しい。

・印西の川には、日本中から集っていると思われるほどの多種の魚がいる。
千葉県の魚の現状は非常に変わってきているが、もとから何がいたのかを知らないとどれだけ荒れてきているかの現状も理解できないと思う。移入を止められないのか。
・嬉しい気持ちで歩き始めようとする里山で必ず目にするゴミの多さ。（アンケート）
・県政が、印西市まで届かない（アンケート）
・個人レベルの小さな開発をとめることが出来ない。斜面林の消失による谷津田の荒廃、サシバの減少。（アンケート）
・町内会・自治会（人と人との結びつき）を活性化していかないと　地域に根ざした環境保全を実践していけないのが現状。

2.現在:実践されている取り組み(効果と課題)

NPO 法人ラーバン千葉ネットワーク:里山観察会、里山水系ウォーク、コスモス畑作り、秋のコスモス里山まつり

印西サシバ調査グループ:印西市を中心としたサシバの調査

NPO せっけんの街印西・NPO 法人せっけんの街白井:廃食油のリサイクル、石鹸をつくる、廃食油をバイオディーゼル燃料（BDF）にリサイクル

印西ゴミと暮らしを考える会:地球温暖化をとめる活動、「もったいない」を実践

小林すみよいまちづくりの会:道作古墳の整備、小林ウォーキング、自然環境の保護

NPO 法人いんざいこども劇場:親子の舞台鑑賞活動、子どもの自然遊び体験活動、子育て支援活動

白井環境ネットワークの会:地球温暖化防止活動に関する学習・勉強・見学会の開催・生ゴミ堆肥化・野菜作りなど

白井の自然を考える会:観察会の実施、ゴミ拾い

NPO 法人しろい環境塾:里山保全活動、農業支援活動、子どもの環境教育活動、市民交流活動

北総生きもの研究会:モニタリング調査、植生調査、散策路の提案、在来種の保護や生息地の保全への提案

白井社会ボランティアの会:西白井周辺の清掃、美化活動、花一杯運動などへの協力、地球温暖化防止活動

3.今後の取り組みについての提案(想定される効果と課題)

・ニュータウンは、ｶﾞｰﾃﾞﾝ･ｼﾃｨとして都市的魅力と田園的魅力を両方備えることが必要

・これからのまちづくりは、周辺地域の生態系と調和させた地元の環境保全政策が必要

・里山を歩くことによって里山の素晴らしさを知ってほしい。里山を訪れる人によってコンセンサス（総意）が生まれる。

・集合住宅の中に里山を作りたい。（街路・住宅地内の落ち葉を資源として利用して、ミニ里山を作る。）→里山を生かしたまちづくり+ゴミ減量+資源発掘

・企業庁所有の塩漬けの土地を利用して、里山として復元したい。（草刈を適度にしてある雑種地は、交渉次第で利用可能）→里山の復元

・PUBLICK　FOOTPUS（散歩道）の提案（そこに住んでいる住民の方々の生活を最大限尊重し、話し合いのもと　古くからある道を遊歩道として利用させてもらう）→新住民と旧住民との交流+里山景観に対する感性の接点

・熱処理による竹、シノダケの加工（焚き火・野焼きによる、森中に広がる竹炭効果）→野外で燃やすという伝統をゴミ処理と混同されている現在の過剰反応への対応+下草処理によるゴミ回避（草丈 30cm 以上になるとゴミを捨てられやすくなる）

・自転車道路でつなぐ里山の提案→北総地域の特長を生かしたまちづくり・排気量削減

・シノ竹素材を使用した楽器ケーナの作成（ケーナには、白井産のシノ竹が最適）→自然素材を利用した遊び道具の提案

・“森を良くしてみたい人”へ、遊休農地の借地と活用の提案→里山保全

・監視役（ゴミパトロール）の提案→里山保全

・在来の人と消費者との交流、融合により生まれる信頼関係に基づく農作物の生産・提供・生産地の貸借→里山保全・地産地消

・里山ウォーキングの主催により、多くの人に里山の良さを認識してもらう（アンケート）→仲間作り

・季節に応じた労働（アンケート）→一次産業主体の社会への前向きな回帰

・多くの団体・サークルが里山関連の活動をしているので、横断的なみんなに知らせる“情報誌”を出して欲しい。（アンケート）→ネットワークづくり

・季節に応じた労働（アンケート）→一次産業主体の社会への前向きな回帰

・10 年前、新住民の多くの団体が交流する場がなく、“祭り”という形で集り、活動を紹介しあっていた。10 年後の今は、市が交流する場を数多く開催するようになった。まずは、市民たちがもっと気軽に交流する場を作ることから始めたらどうですか。（アンケート）→ネットワークづくり・情報交換

・昔から住んでいる方々が提案する『未来に残したい里山』（スライドの別バージョン）の作成（アンケート）→里山保全を地元の方自らが提案者となって里山 PR

4.:行政、学校、専門家、県民、企業等への意見(期待する役割など)

・千葉県へ・・・水路の U 字溝は止めて欲しい。生きものにとって良好な水路の提案を県におこなって欲しい。

・県へ・・・環境調査を行い、まず現状把握をした上で生きものに配慮したまちづくりへ生かしていただきたい。そのためのお金を出して欲しい。

・県・市の教育委員会へ・・・県下の小・中学校で里山での環境教育の取り組みを推進して欲しい（各学校に近隣の里山・休耕田を割り当て、その地形に合わせた属地主義で各クラス毎に 1 年間管理に当たってもらう）→里山保全・休耕田再生

・私たちの飲み水の取水口は、手賀沼の排水口の下流部にある。どうにかならないか。

5.自由記述

実行委員の総括・課題の実行に向けての課題は別途資料

記入上の留意点　1)論点整理の 1～4 の記述は箇条書きとし、文字数は一項目 150 字程度以内とする。
2)枠が足りない場合は、枠を拡張して記述する。ただし、全体の頁数は 3 頁以内とする。
3)特に強調したい箇所がある場合は、その箇所にアンダーラインを引く。

タウンミーティング開催結果概要			
会議の名称	北総里山タウンミーティング　―生物多様性ちば県戦略づくりにむけて―		
日　　時	平成１８年１２月１０日（日）13：30～16：15		
地域・会場	東京電機大学　福田ホール	出席人数	２１０人
主催団体	北総里山タウンミーティング実行委員会		
あいさつ **趣旨説明**	○開催あいさつ　　ケビン・ショート氏（東京情報大学教授） ・千葉ニュータウンには都市的な刺激と里山自然がある。今後どのようなシステムで里山自然を守っていくかがポイントになる。 ○県から趣旨・スケジュール等を説明		
講　　演	○「イギリスのニュータウン開発の顛末に学ぶ」　池田志朗氏 ・イギリスはニュータウンの生まれ故郷（田園都市が 1904 年ｽﾀｰﾄ） ・最初のﾚｯﾁﾜｰｽは街に農地を取り込む形で街を開発、最後のｱｰﾋﾞﾝは既存市街を再開発で活性化する（都市の継続的な開発・運営を展開） ・印西牧の原は、駅を中心に南北に里山の緑の軸を貫入させている。 ・ニュータウンは、ｶﾞｰﾃﾞﾝ・ｼﾃｨとして都市的魅力と田園的魅力を両方備えていることが重要である。人間は田園から離れられないためである。		
スライドショー	○北総の里山物語・生き物の声を聴こう　長谷川　雅美氏（東邦大学教授） ・北総の里山では、開発から 20 年以上がたち緑も育ってきた状況もあるが、一方、ゴミの投棄や三面張りの水路など多様性を損なう傾向が強い。 ・自分の好きな場所を見つけ、周辺の環境から川、海へのつながりを意識。足元から対応を積み上げていく。（ｼﾝｸ・ｸﾞﾛｰﾊﾞﾘｰ、ｱｸﾄ・ﾛｰｶﾘｰ） ・市民活動としての横のつながり（連携）が重要。イベントカレンダーやよい場所のカタログ、地図等を作成し、多くの方々の参加を得る。 ・これからのまちづくりは、周辺地域の生態系と調和させた地元の環境保全政策が必要になる。		

主な意見等	○意見交換 ・地域内に産廃の不法投棄があり土をかぶせ畑になっている。上辺はきれいでも地下水が危ない。引越しの家具等がそのまま捨ててある。 ・住民が生活している近所で鉄砲で狩猟をしているが、こわくて里山を歩けない。これで良いのか。 ・新しい住民と土地を所有している旧来の住民が融合しなくてはダメ。 ・農地をもっている人と都市に住んでいる人をつなげることで、遊休農地を活用できるのではないか。 ・新住民に、団地の中の枯葉を利用しミニ里山を作って欲しい。農家は高齢化で里山も畑も荒れているため、家庭菜園をやって欲しい。 ・県企業庁の土地を使わせてもらい、里山として復元してほしい。 ・PTA の親父の会で酒を酌み交わし新旧住民の融合を図っている。 ・科学物質に過敏な者もいる。戦略に農薬の視点も入れて欲しい。 ・みんなで近くで採れた農産物を買おう。そうすれば農家もよいものを作り、農薬を減らす。 ・谷津田は多様性の宝庫。U 字溝は経済的だがやめて欲しい。 ・里山再生で篠を切ったりしているが燃やすと周囲が過剰に反応する。 ・竹や枝打ちしたものを燃やすことで発生する竹酢液や木酢液といった熱処理効果を見直してほしい。 ・環境には車でなく自転車が良い。自転車道の整備も必要。 ・里山を自分で歩いて確認し、感動することが必要。 ・その場所に住んでいる人に対して話し合いをもって解決していくことが必要。